

# 聴覚障害児の日本語意識に関する一研究

—日本語意識と読書・インターネット利用状況を中心に—

○林雄大

澤隆史

新海晃

(東京学芸大学大学院教育学研究科)

(東京学芸大学)

(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)

KEY WORDS: 聴覚障害 日本語意識 読書

## 【問題と目的】

聴覚障害児の日本語の読み能力には様々な困難があり(白石・澤, 2015), 従来の研究では, 読み能力の特徴や発達の変化に関する実験や調査の結果に基づく実証的検討を中心に組み組んできた。一方で, 聴覚障害児の日本語に対する意識や日本語学習への意欲の様相, 発達的变化等については十分検討されていない。そこで本研究では聴覚障害児を対象に日本語意識や日本語の学習動機等に関する質問紙調査を行い, 聴覚障害児の日本語意識や読書習慣及びインターネット利用状況の実態を明らかにすることを目的とする。

## 【方法】

### 1. 対象児

聴覚障害を対象とする特別支援学校3校に在籍する中学部生徒106名及び高等部生徒89名, 計195名を対象とした。

### 2. 調査質問紙の内容

調査用紙は「1. 生活の様子に関すること」, 「2. 読書とインターネットに関すること」, 「3. 日本語意識に関すること」, 「4. 過去のことばの学習に関すること」, 「5. 将来に関すること」の5領域, 計75項目及び学年, 性別の記入を求めるフェイスシートから構成した。このうち1は, 選択方式で, その他の4領域は当てはまれば4, 当てはまらなければ1, という4段階評定で回答させた。また5のうち, 国語や日本語の勉強方法における工夫について, 自由記述で回答させた。

### 3. 手続き

2016年12月～2017年2月にかけて調査を実施した。なお本研究の目的と個人情報の扱いと説明した文章を学校及び保護者に提示し, 同意を得た上で回収した。

### 4. 分析方法

4段階評定の質問項目について, それぞれ1～4点に得点化した。

## 【結果】

### 1. 日本語意識に関する因子構造

質問紙調査の項目のうち, 日本語意識に関する28項目の評定値について因子分析(主因子法)を行った。固有値1.00を基準値としたところ, 4因子構造が妥当であると考えられた。次に主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量の絶対値が3.5未満の項目を除外し, 26項目による因子分析(主因子法・プロマックス回転)を再度行い, 結果を表1に示した。

表1 抽出された因子と具体的な質問項目

因子名	項目数	質問項目の内容例
実用性への意識	8	日本語の力を伸ばせば, 生活で役に立つ
日本語への興味	9	私は日本語が好きだ
苦手意識	6	私は漢字や文法を難しく感じることもある
学習への意欲	3	私は知っている言葉を増やしたいと思うときがある

### 2. 因子得点によるクラスター分析

対象児の各因子における因子得点を基にクラスター分析を行った結果, 5グループに分類された。各群において因子ごとの因子得点の平均値を算出した(図1)。それぞれの特徴から5グループを「日本語不用群」, 「日本語無関心群」, 「日本語苦手群」, 「消極的学習群」, 「積極的学習群」と名付けた。

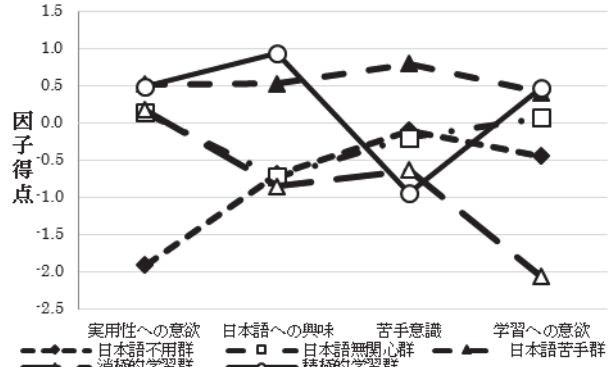


図1 クラスター分析による各群の因子得点の平均値

### 3. 各群における読書とインターネット利用状況の分析

書籍・漫画の保有冊数及び読書時間では積極的学習群や日本語苦手群が多く, 日本語不要群と日本語無関心群では漫画を好んで読む傾向があること, 消極的学習群は保有冊数の少なさに反して読書時間が比較的に長いことが明らかになった。また, 中学部, 高等部別に分析した結果, 日本語不要群と日本語無関心群は学年進行に伴って読書時間が減少する傾向にあるのに対して, 消極的学習群では増大する傾向にあることが明らかになった。また, 読書意識については読書への好みで群間に差が見られるものの, 全体的に読書の有用性を認め, 読み能力に限定した項目では日本語不用群を除く4群がその効果を認めていることが示された。さらに, 積極的学習群, 日本語苦手群, 消極的学習群は映画, テレビ等や友人等を書籍に関する情報源として活用しているのに対して, 日本語不用群と日本語無関心群は活用する群と活用しない群に二分されるという傾向が認められた。聴覚障害児のインターネット利用状況では, 全体的に電子メールからソーシャルメディアへコミュニケーション手段の移行が進んでいること, インターネットへのアクセス頻度に関する項目では全体的に積極的学習群が最も高く, 学習レベルでの検索と生活レベルでの検索は異なる結果となった。

## 【考察】

本研究の結果, 日本語意識に関する4因子が抽出され, 5つの群が形成された。これらは日本語意識等が近年の情報通信技術の進歩や聴覚障害者の進路の拡大等の社会的要因に影響を受けていることが推察される。先行研究で指摘された言語使用の困難が苦手意識として表れていることは無視できないが, 同時に課題を克服しようとする姿勢が学習への意欲に反映されており, 聴覚障害児の日本語意識の一端を示す結果となった。さらに, 今回の結果から聴覚障害児の読書への意識は一定程度高いこと, 情報社会に適切に対応する力を育成することの必要性等が示唆された。今後は個人属性及び言語環境と読み能力との相関を明らかにしていく必要がある。

※本研究は, 平成29年度科学研究費基盤研究(C)(課題番号:15K04544)の補助を受けて行った。

参考文献: 白石・澤(2015)東京学芸大学紀要, 66(2), 231-238. (HAYASHI Yudai, SAWA Takashi, SHINKAI Akira)